

回想の山田耕筰先生

——晩年の語録・人となり 点描——

On Reminiscences of Professor Kōsaku Yamada

——His Words and Personality in His Last Years——

酒 井 諄

相愛学園創立 100 周年の今年は、1958 年 4 月の相愛女子大学（現在相愛大学）音楽学部の発足から丁度 30 年、その前身ともいべき相愛女子専門学校に音楽科が設置された 1937 年から数えて 51 年である。その何れの場合にも、相愛学園における音楽教育部門の組織と運営の中心人物としてかかわってこられたのが山田耕筰先生である。

この、近代日本楽壇確立の父ともいべき山田先生と相愛とのかかわりは、単なる象徴的存在とか名義本位に留まるものではなく、まさに教育組織の中心人物として、つまり教員人事やカリキュラム編成、教育方針の策定推進等いろいろな面で主導的な役割りを果たしたのであった。とりわけ先生の最晩年の約 10 年間、年代的には 1955 年 10 月から 1958 年 3 月迄を相愛女子短期大学音楽科長、1958 年 4 月から 1965 年 12 月のご逝去まで相愛女子大学音楽学部長として在任された。

筆者は、1953 年の春、相愛女子短期大学の音楽科発足時から相愛学園に勤務し、当初から学園音楽教育部門において、当時教務課長の任にあった仲芳樹名誉教授並びに声楽の嘉納愛子名誉教授らと共に、教務担当者の 1 人として関わってきたので、1954、5 年以来相愛学園における山田耕筰先生の側近にあって種々先生の指示を仰ぎつつ働いてきた関係上、先生の晩年約 10 年間の、



山田先生ご夫妻と今小路学長
(1955年多摩川の堤にて、今小路学長写す)



今小路覚瑞学長と石倉小三郎教授（右）

（1957年頃、筆者写す）

特に相愛とのかかわりにおける先生の消息の大方を承知しているものの1人として、この創立100周年という記念すべき年に当り、山田耕筰先生をめぐる若干の記録を留めることは意義あることと思うし、また責任もあることだと考える。

旧制相愛女専音楽科と山田耕筰先生との関係については、仲芳樹相愛大学名誉教授の『ベゴニアの花は咲

きぬ』やその続編ともいべき『愛のりこーる』などの著作にくわしく述べられているのでそれにゆずるが、第2次世界大戦後、相愛学園と山田耕筰先生との再度の結びつきは昭和25年の相愛女専への教授再任から、つづいて相愛女子短期大学音楽科の作曲担当教授として始まった。R. シューマンの合唱曲「流浪の民」の名訳者として、また我が国初の『西洋音楽史』（1905年）の著者として名高い我が国音楽学界の草分け石倉小三部教授（1881～1965）は、1952年度に相愛女子音楽科長に就任、その翌年から相愛女子短大音楽科の初代音楽科長として重要な役割りを果されたのであったが³⁾、短大音楽科の発足から早くも1、2年の間に、新たな構想が立てられることになった。というのは、既に数年来東京では「桐朋学園子供のための音楽教室」の目ざましい成果が注目されつつあったが、その関西版ともいべき音楽教室を大阪でも始めたいという動きがあり、相愛学園にその場所を提供してほしいとの話しが、関係者から今小路学園長にもちこまれ、それを受けた学園長は、その企画をむしろ相愛学園自らの手でやろう、と決断されたのである。そして一方、音楽の高等専門教育が「短期大学レベルでは不十分」とする与論も全国的に胚胎しつつあり、相愛としても近い将来4年制の大学音楽学部の設置を目ざすという構想がこれと合体して、一挙に音楽部門の拡充計画が浮上してきた。

1955年の夏、〈相愛学園子供の音楽教室〉の基礎学科（ソルフェージュ等）の担当予定メンバー10余名が桐朋学園へ出向して、約1週間にわたる研修会をもった。当時から桐朋学園短期大学長であった井口基成先生——相愛では音楽教室室長となっていた——をはじめ、吉田秀和（桐朋学園子供のための音楽教室々長）——相愛の音楽教室では学科主任になっていた——、柴田南雄、入野義朗、寺西春雄、別宮貞雄、伊藤ハナ、小林福子、萩谷納、畑中更予ら、当教室創設以来のヴェテランの諸先生から懇篤なアドバイス

や指導をうけて、秋からの開室に備えた。

これと同じ頃、〈相愛学園子供音楽教室〉設立のための趣旨説明会開催の案内状（ひいては協力依頼の趣意書）が、京阪神を中心とする多数の音楽家に向けて発せられた。その全文（原文のままだが、縦書きを横書きに直した）を次にあげよう。

戦後我国に於ける音楽事情の発展、ことに関西楽壇の急激なる向上はめざましいものがありますが、その状況は夙に音楽教育機関に就きましても、関西により優れた本格的な音楽学校の建設を一般に要望されているところであります。此の問題に関して、学園音楽科の創設者でもある山田耕筰教授を中心に、兼てより考慮致して居りましたところがほぼ次の如き計画のもとに新しく発足する運びとなりました。此の際に之を公にしまして、直接関西の音楽社会に御活躍中の皆様方に御聴きとり願いますと共に、広く御高見を戴き、将来学園音楽科のために御支援下さいます様御願ひ申し上げます。一、イ、教授陣容は現在我国に於ける各部門の最高権威者である左記の如き人々を以て構成し、之は単に名目上のものではなく常時直接指導に当たります。

山田耕筰教授 音楽科長兼宗教音楽部長

井口基成教授 ピアノ部長

伊藤武雄教授 声楽部長

池内友次郎教授 楽理・作曲部長

斎藤秀雄教授 弦楽部長

辻 輝子教授 声楽部

鷲見三郎教授 弦楽部（ヴァイオリン）

吉田秀和教授 4)

ロ、学校機構は現在の短期大学及び高等学校音楽科から当然近き将来に於て音楽大学への移行を目ざしているものであります。

ハ、本学園の設立運営のになつて居ります意義にも関連して一般音楽教育と合せて宗教音楽ことに仏教音楽に於ける諸々の活動の基礎を形成するための運営を計り度いと考へて居ります。

二、音楽教育に於ける早期教育の重要性は強く要望されているところであり、すでに東京では大なる成果をあげつつあることは御承知の通りですが、之の大阪に於ける最初の総合的な児童学園を設立致します。

相愛学園理事長 今小路覚瑞



主任教授の集い——左から吉田秀和、齋藤秀雄、山田真梨子、井口基成、山田耕筰、池内友次郎、伊藤武雄の諸先生（1955年秋）

この文書は、相愛学園の4年制大学音楽学部構想と子供の音楽教室開設に関する公式告示の意味をもつものであるが、残念乍ら発行の日付の記載がないので正確な月日は不明である。しかし、相愛学園にとっては音楽教室開設の

「前夜祭」ともいべき〈桐朋学園オーケストラ〉の関西初公演が、1955年9月4日（毎日会館で、齋藤秀雄先生と、当時学生だった小沢征爾氏の指揮により行なわれた）、また上記趣意書の主任教授らによる〈音楽科拡充記念相愛学園演奏会〉が10月14日（産経ホール）に開催されており、子供の音楽教室の開設PRが8～9月に行なわれて、10月16日に第1次生徒募集入試が行なわれているから、この案内状の発信は7月中ではなかったかと思われる。つまりこの1955年秋を期して、山田耕筰先生が短大音楽科長に就任されたわけである。以来山田先生を中心に逐次協議を重ねて、2年後（1957年）秋の4年制大学音楽学部の設置申請、年末の認可、1958年4月の開設と運ばれたのである。

1937年から始まった女専音楽科についてもさることながら、とりわけ1955年に日本における音楽各分野のトップ人事をそろえての「第1次音楽科拡充計画」（上述）と、1958年からの音楽学部教員組織の充実ぶりは全国の注目的となったのであるが、それは、山田耕筰先生なればこそ実現したことであり、これが今日の相愛における音楽部門のゆるぎない基盤となったことを、われわれは銘記すべきであろう。

ちなみに、1957年9月末日の音楽学部設置申請メ切日当日、筆者はトランク一杯に申請書類を詰め込んで午後の伊丹空港発日本航空機で羽田へ向い、夕刻ぎりぎりに文部省に到着したのだが、その日の次便「雲仙号」が伊丹空港離陸直後不時着炎上（乗客全員助かる）のニュースを翌朝知り、肝を冷やしたことを覚えている。しかしそれにも増して、3日後（10月4日）の新聞に報導された「人工衛星第1号」ソ連のスプートニクの成功を告げるニュースに、新時代の幕明けを痛感して異常な興奮をみなぎらせた葉書を今小路学長宛に送った記憶が、まざまざと甦えるのである。

この、大学設置申請の年には、教授組織の再編その他乗り越えるべき幾つかの難問題も

あたりして、山田先生の来阪も最も頻繁であったが、東京の山田先生宅へも筆者など何度足をはこんだことか。因みに、私の手帖のメモによると、山田先生の来阪回数は、1955年が4回、1956年2回、1957年10回、1958年5回（以下略。でも以後の回数はわずかで、1962年相愛の学生コーラスと共に関西テレビに出演された時のご来阪が最後となった）。初期には東京から乗用車で来られたことも時折あったが、後には伊丹空港着で、その都度私は空港へお迎えに出てホテルまでお伴するという風であった。

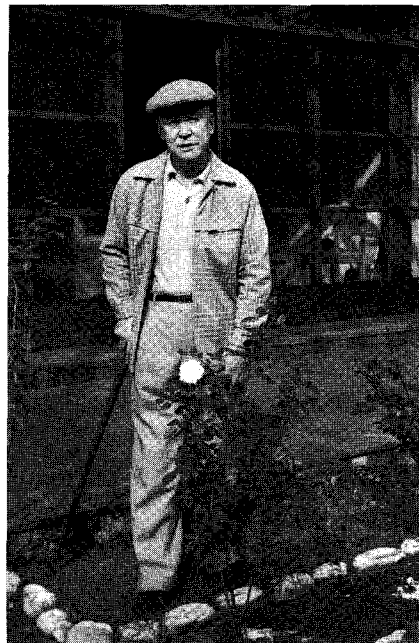
先生の最晩年には、ご病気のこともあって来阪される機会もなくなったが、1965年12月の御逝去まで、相愛女子大学音楽学部長としての任に就かれていたのである。

さて、晩年の山田耕筈先生に親しく接することの出来た一人として、筆者が折にふれて感得した山田先生の人となりの一端を、先生自身の言葉とともに、いくつかのエピソードとしてとりあげてみよう。

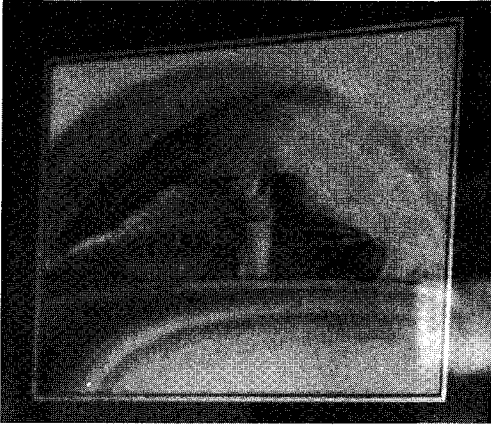
1 枚 の 絵

山田耕筈先生の田園調布のお宅は、筆者にとってもなつかしいところである。1954年頃から数年の間、このお住いを何度訪れたことか。特に1955年から57年頃は、殆ど毎月のように伺っては学校のことで御指示を仰いだり相談にのってもらったりで、たまには泊ってしてしまうこともあった。

先生がこよなく愛されたバラ園に面してベランダ付きの広い開口部をもった応接間があり、その暖炉上の壁面に1枚の額絵が掛っていた（次頁写真）。クロッキー風の素朴なこの絵を示しながら山田先生が私に語って下さった話はこうだった。自分がかって訪ソの折、何かの席で音楽修業の殿堂の話をしたことがある。その殿堂の地下は、オーケストラ楽員の宿舎兼道場になっており、上部はコンサートホールの構造をもつ。楽員はここを根拠に一緒に作物を作って自給自足の共同生活を営み、また昼間の時間を上のホールで演奏に励み、また冥想して精神をみがく、そのような殿堂の建設と音楽の集団活動を理想として構想しているという自分の話をきいた1人の画家が、大変感動してそのイメージを1枚の絵に描いて自分にくれた



71～2歳の頃の先生
——田園調布のお宅にて（筆者写す）



山田先生居室の額絵（筆者写す）

ものだ、と、大体そのようなお話であったと思う。私はこの話しを聞きながら、すぐさま古代ギリシアに伝えられる「ピュタゴラスの徒」の共同生活・修養の話进行想い起しつつ、先生の音楽への献身の根本精神にふれる思いがしたのであった。その後も先生のお宅を訪れるごとに、何となくその絵にひかれる思いであったが、最近になって、先生の早い頃の著作の中にある次のような一文を発見し、改めて思い当たり感銘を深めたのである。

「最近に於いて私は、ふとこんなことを考へるやうになった。といふのは、外でもない。一つの新しい音楽の殿堂を築くことである。それは謂ふ所の音楽堂でも、劇場でもない。特殊な組織のもとに建てられた礼拝堂か、祈禱場の如き楽堂である。此の殿堂は人里離れた静かな森の只中に建てられなければならない。深い樹林と、そして清澄な泉の水とによって、俗界の噪音の外に埋められ、秘め隠されてゐなければならない。此の聖堂は一つの大きな円形から成る。その半ばは地下に、半ばはかのビザンティンのドームの如く、ゆるやかにまろく、古木の樹間にもれ上って居る。オベークな厚い壁が、此の円天井の中心へと、地下の凹形の周囲から、円錐形に上って行く。楽人は此の半透明な円錐形の底に影をひそめて、基処から純美な音楽の精髓だけを円天井の頂へと開化せしめる。そして聴衆は、壁の外にしつらへられた、一人々々の柔かな、深い座席に身を埋め、祈るやうな気持で冥想しながら、聖堂の底から鳴り響いて来る音楽を心の底まで泌みこませる。

此の堂に入り、此の森に踏み入るものゝ是非とも遵奉しなければならぬ信条は、絶対の孤独と沈黙とである。人々は此の森に足を踏み入れると同時に口を噤み、心を静めて俗世から離れねばならぬ。……（3行略）……其処で、個々人は真実の孤独な自分に帰って、静かに、厳肅に、音を聴き、音と一つになって敬虔ないのりの心を、円天井の屋根を通して見えざる神の御座へと昇らせる。そして彼等は、浄められ、高められ、美化せられた心で、又沈黙のまま静かに此の聖堂を出て、ひとりびとり、森の入口へと静かに歩み去る。そこで親は子と、兄は妹と、恋するものはその愛するものと、生れ更ったやうな清浄な気持でめぐり逢ひ、澄みきった心でお互ひの存在をことほぎあひ、聖なる愛と悦びに輝く面をそろへて、又日毎の生活にかへって行く。

生あるかぎり、人間は、何らかの意味に於いて神を求め、宗教を求めずには居られない。私はかつて、芸術殊に音楽は究極に於いて宗教にまで高められなければならない、又その

与へる感動も単なる官能的感情的陶醉以上の霊の法悦の境にまで引き上げられたものでなければならぬといふことを主張した。私の心には既に築かれてある此の殿堂は、人間本来の欲求である宗教心を充すと同時に、音楽の究境である法悦の境を最も完全に、最も純粹に実現し得る至聖所である。……（4行略）……泰西の文化を厭ひ現在の欧米の人とその芸術とに失望した私は、今最愛なる日本の何処かに、此の森を、此の聖堂を建立せんことをひたすらに望んでいる。そして、此の殿堂は——私の目指している法悦境は、日本以外の何れの地にも、開花することの出来ぬ純美な生の花であり、芸術の花であると思ふ。……（後略）……」——1922, 11, 20——⁵⁾

何たる名文！ この一文だけからしても、山田先生の汎神論的な、そしてこんな言い方が許されるならば「汎美学的」なる精神の一端が伺えると思う。

プロコフィエフとの出会い

同じく田園調布のお宅、書齋でくつろいでおられた時に伺った話だったと思う。先生がアメリカで始めてセルゲイ・プロコフィエフと会われた時のこと。新進気鋭の青年作曲家プロコフィエフとの話がはずんで来たさ中に、先生は彼に向かって、「君は音楽家の中で誰を一番尊敬しているか」とたずねられた。「バッハか？」——No! 「モーツァルトか？」——No! 「ベートーヴェンか？」——No! とすべてかぶりをふるので、「それなら一体誰を？」といったところ、彼はわれと我が胸を指さして、「この俺さ！」と誇らしげに答えたのだそうである。その顔は気鋭の作曲家としての血気と自負に充ちていたことであろう。

さて時は移り、十数年後、先生は楽旅の途次モスクワでプロコフィエフと再会、互いに懐旧の情をあたためて歓談することが出来た。その時先生はふと思い出して、あえてプロコフィエフに尋ねてみられたそうである。「あなたは、前に、音楽家で一番偉いと思うのは誰でもない、自分自身だと言っていたね。今でもそう思っているのか」と。彼はとたんに手を振って、「とんでもない！ バッハ、モーツァルト……皆偉大だ、自分など到底及びつかない存在だ」と答えたというのである。

プロコフィエフは1891年の生れだから、山田先生より約5歳年下、1917年のソビエト革命の煩を避けて1918年に出国、日本経由（6月から8月まで滞日、東京、横浜で計3回のコンサートを開いている⁶⁾）、9月初旬にニューヨーク着でアメリカでの生活が始まり、後1923年秋からパリに居を移しているが、その後もアメリカほかヨーロッパ各国を足しげく訪れており、遂に1932年、ソビエトに復帰するのだが、それ迄にも何度か祖国の土をふんでいる。

山田先生の伝記『この道』⁷⁾によれば、上記の、山田先生とプロコフィエフとの出会いは、

初回が山田先生のカーネギーホールでの自作品初公演の時、つまり1918年10月——山田先生32歳、プロコフィエフ27歳。そして再会は1931年、先生がパリからソビエトへ出てモスクワ、レニングラード、キエフ等の各地で演奏会や講演会をもたれた時——山田先生45歳、プロコフィエフ40歳という何れも円熟期——ということかもしれない。⁸⁾

或いは、掛下慶吉氏の著作『昭和楽壇の黎明』によれば次の通りである。(上記伝記からの推定とは、1、2年のズレがあるが、それは話しの本筋にかかわる程のことでもないであろう。)

「……プロコフィエフが死亡した翌年の1954年に上田仁指揮による宝響により、彼の最後の交響曲である〈第七交響曲〉の日本初演の際、『シンフォニー』に山田先生が寄稿された『ゼルゲイ・プロコフィエフを想う』という一文の中で当時の思い出を次のように語っている。

『……私が初めてプロコフィエフに逢ったのは、1919年(大正8年——その前年、彼は日本に立ち寄っている)1月のある夜、ニューヨーク21番街にあるフランスの寺院を思わせる倶楽部の一室であった。……彼が友人と私共の食卓についたのはかれこれ8時を大分廻った頃と覚えている……。プロコフィエフは長身のためかやや猫背の痩せた神経質な青年であった。口角の突き出た彼の相貌は一革命家としての人相を十分に備えていた。よし革命家とまでいかなくとも、その風貌のうちには何処かしら「不逞な気」が宿っているようだ。鷹揚というより、寧ろ傲岸に近い彼の態度であるが、それでも話が彼の作曲に対する信条に触れると彼は寸隙を入れず、「形式の打破！ 自由な表現！」と叫んだ……。

その後も種々な夜会や宴席などで親しくお互の名を呼び捨てにする間柄に迄なったのだが、1919年以後は全く会う機会がなかった。1933年、私の再度のソヴィエト訪問の時、偶然にも彼と逢う機会に恵まれたのである。その夜私は同行の妻と食事をしていて、もう1時近い真夜中であった。それは国賓や知名の士たちの宿舎としてあてられているホテル・メトロポールの食堂であった。私どもはその晩始めて相識した隣席のスイスの名指揮者アンセルメと知らぬ間に感激の汗にぬれた手を握り合ったまま茫然としていた。その昂奮から抜けきらず、ただ黙ったままフォークを動かしていたのである。

すると私共の卓に向って近寄って来る紳士がいる。よく見ると、プロコフィエフではないか。私は思わず立上って「セルゲイ！」と叫びざま握手した。彼も親愛の情のこもった眼で私をみつめ乍ら、それでも例の皮肉を忘れず「コウサク、髪はどうした？ 何処へ置き忘れて来た？」というのだ。私も久闊を喜び乍らも「そういう君も禿げたねえー」「いや、ニューヨーク時代はお互いに毛が多すぎたよ。」考えて見ると言う事も若かった！ という風に二人の話はいつまでも尽きなかった』と如何にも二人の交際を眼前で見るようであり、ときどきユーモアを交えながら欧米滞在中の逸話を愉快地話してくれるのであった。

今にして思えばもっといろいろと聞いておきたかったと思う。彼は欧米のどんな人達に対しても決して遠慮することなく対等で話をした。」⁹⁾

私自身、プロコフィエフは近・現代作曲家中でも格別に大きな存在だと考えるが、山田先生の先述のお話を伺って、彼の作風の充実した展開ぶりも、さればこそと改めて思い当る気がした。そしてこの時の話しを味わい返しながら、私は、どういふわけかソクラテスを想わずにはおれなかった。「無知の自覚こそ最高の知」とするのが彼の哲学の根本命題であるが、芸術創造のいとなみもまた、絶えまない自己否定ないし自己克服の上にかこそ成り立つとされる。反面、自己過信や独善は真の芸術家の生命を亡ぼすものなのである。

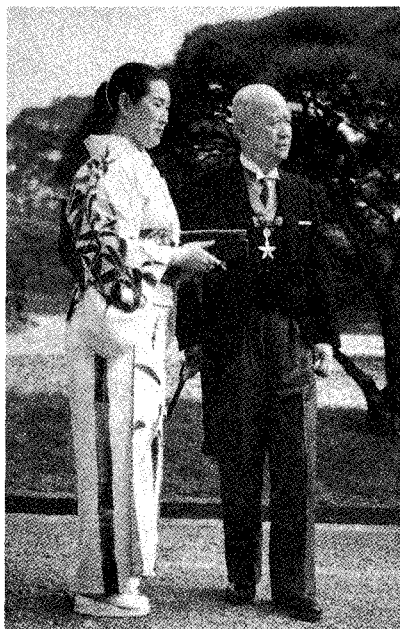
この話しを回想しながら、さらにその後私は親鸞聖人の精神的境地にまで思いを馳せるのである。かつて金子大栄師のお話しを、本町学舎の教員研修会で伺ったことがあった。その折、師は聖人最晩年の境地（『歎異抄』に反映）を、聖人円熟期の『教行信證』に見られる表現と比較して、定言的・断定的な語調から晩年の一見あいまいないし懐疑的とも見える言表への変化を、「絶対的世界」から、いふなれば「絶対的相対の世界」への深まりとして解釈出来る、との見解と示されたのであった。

ソクラテスや親鸞聖人への連想は筆者の思い入れとしても、プロコフィエフにまつわる山田先生の思い出話は、少くとも芸術家の真に在るべき姿を指し示しているといえるのではなからうか。

文化勲章受賞のあとで

1956年11月3日、山田耕筰先生は我が国洋楽界初の文化勲章受賞者となられた。丁度その前日、大学の連絡事項と或要務のため東京へ出張した私は、先生のお宅へ伺って、その夜は泊めていただいた。或要務とは、当時短大音楽科に在学中だった弘世（旧姓）初子さんが、メルボルンオリンピックの高飛込と飛板飛込の2種目出場の選手として11月4日の羽田発に、学校代表として見送るといふ任務であった（勿論山田先生の歓送の花束も携えて）。

11月3日、山田邸での泊り明け当日、昼頃だったと思うが、文化勲章の受賞を終えて真梨子夫人と一緒に帰宅された先生は、着替えをすまされた



文化勲章受賞時の御夫妻

(1956年11月3日皇居にて)

——追悼演奏会プログラム「この道」より転載——



相愛学園主催「山田耕筰先生文化勲章受賞記念祝賀会」にて
——前列中央が山田先生御夫妻（1957年1月23日大阪国際ホテル）

後すぐさま私に、白色
5 弁の橘花の文化勲章
を示されながら、しみ
じみとした口調で語ら
れた。「この花びらを
千々にぎざんで、日本
中の音楽家の人たちに
頒ちたい。これは私一
人のものではないのだ
」と。何らの銜いも
気負いも感じられない、
思いのままを卒直に吐
露されるような、まこ
とに淡々としたそのお

言葉の中に、私は、先生の万感の想いを、そして海原のような大人格を感じて眼がしらが熱くなるのを禁じえなかったのである。

山田先生の生前を知る音楽界の大先輩たちは皆、山田先生の我が国楽壇の基礎確立の大立て者としての存在を認めることには異存がないが、その一方で先生の人となりに関して、往々、大ボラ吹き、大言壮語家、見えっぱり、権威主義、金使いの荒っぽさ（たえまない借金苦）、そしていろいろと取り沙汰された女性遍歴等々を云々する。それらは、少壮～円熟期の頃の先生について一面識もなかった筆者の経験外のこともかもしれないが、しかし晩年の先生から流れ出る人間性^{ユマニテ}を通して感得するところ、^{ひんしゆく}響盛すべき人間像として非難されるような上記要因などは、山田先生本然の姿とはおよそ無縁のものであったように、私には思えてならないのである。

その点、山田耕筰伝『この道』で、先生の生涯について執筆された3人の側近——マネジャーとして先生に仕え、先生をこよなく愛し理解しつづけてこられた湯川晃（米林那翁次）、瀧真吉、高沢智昌3氏（何れも日本楽劇協会理事）の冷静かつ忠実な記録に敬意を表するものである。

相愛学園歌秘話

相愛学園創立70周年記念に際して、今小路相愛学園長の懇望により作曲された、大木惇夫作詞、山田耕筰作曲になる〈相愛学園歌〉は、約400曲をこえるといわれる山田先生の校歌、社歌、団体歌¹⁰⁾の類の中でも傑作中の傑作というべきものであろう。先生の創作活動



相愛学園創立70周年記念演奏会での相愛学園歌発表（1958年5月17日相愛講堂）
——山田先生指揮の関西交響楽団と相愛女子大合唱団——

の殆ど最後の時期、1958年にこの学園歌は出来たのであるが、とても晩年の作とは思えぬ程のみずみずしさ、その流麗さ、馥郁たる香気は、まさに相愛学園関係者の誇りとするに足るものであろう。

このオリジナルの自筆楽譜は、山田先生一流の美しく繊細な淡色の鉛筆書きで、譜面の末尾には、Feb. 21, 1958 Tokyo と記されている。筆者の手帖によれば、この年（1958年）「2月23日（日）山田先生来阪」とあり、つまり、2日前に完成したばかりの学園歌を携えて先生は来阪されたのである。伊丹空港で先生をお迎えしてグランドホテルに到着、ホテルの部屋に入られた先生は早速「出来たよ」といって楽譜を差し出された。私はそれを受取るなり、さっと目を通して歌い出した。（学園歌をお初に歌うという栄に浴したわけである。）2度、3度と歌って行って、やがて私は思わず先生に向かって言った。まさに憶面もなくである。この曲も先生



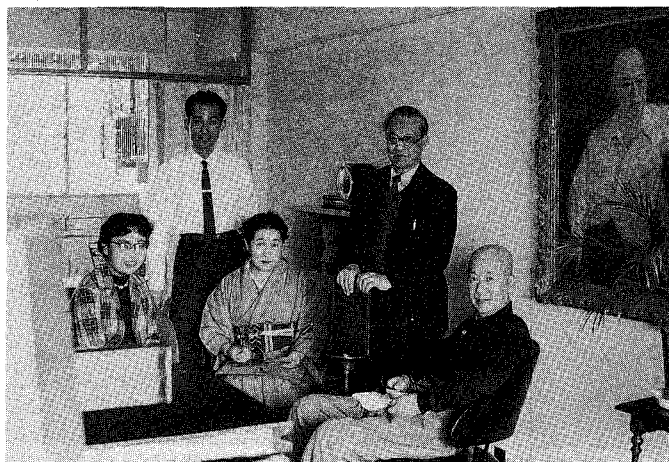
相愛学園創立70周年記念文芸講演会の日（1958年5月18日）
前列左より山田先生、大木惇夫・亀井勝一郎・吉川英治の諸氏、後列中央
山田真梨子先生、吉川英治夫人、1人おいて杉本健吉画伯（筆者写す）

の作品によく見られる、4/4 と 3/4 拍子の混合であるが、冒頭第1句のメロディ 2ヶ所について、それぞれ1拍づつ短かくした方が流れがよくはないでしょうか、と申し上げたのである。先生はしばらく考えておられて、やがて、「うん、そうだね」といって早速みずからその箇所を消しゴムで訂正されたのである。それはほんの束の間のことであった。やがて私はその楽譜をうやうやしくいただき、本町で待機しておられた今小路学園長のもとに届けた。

このエピソードを、本来はそっとしておくべきかもしれないのに、はしたなくもあえてもち出したのはほかでもない。先にもふれたように、山田先生の天真爛漫というか、こだわらない卒直さというか、まことに純真無垢なる精神が、このささやかな情景にみじくも発露していると、この時にも後になって心底から感じたからなのである。ほかには何らの思わくもないことを申しそえておきたい。

Musiker と Musikant

筆者が山田先生の使い走り（勿論大学の要務で）を始めた当初、先生は私にいろいろなことを教えて下さった。若い頃には美学の勉強もしたいと思ったことも屢々だったこと、日本語の発声のこと（発声というものは、本質的には夫々の国語に固有のもので、万国共通ということはあるえない、というのが先生の持論だったようだ）、ドイツ語で Papagei-kunst というのがあって、それはまことに次元の低い音楽の在り方の代名詞だが、とかくそのレベルでしか音楽がなされていないのが残念だ、というご意見。そんな中でも特に印象に残っているのが、やはりドイツ語の Musiker と Musikant の違いについて、である。つまり Musiker というのが本来在るべき音楽家の姿であり、ただ技術のみに練達した職人



門下生大中寅二氏（後列右）の来訪をうけられる山田先生御夫妻
——1958年頃東京原宿のお宅にて（筆者写す）

的音楽家を Musikant とい
って、ドイツでは、はっきり
区別する考え方がある。
真の Musiker を目指すた
めに、われわれはもっと人
間としての修養と、文化や
いろいろな芸術についての
素養もしっかりと養わね
ばならない、というような
ご意見を何度も聞かされた
ように思う。

堀内敬三氏の『音楽五十

年史』中の、次のような一文も、若くして既にその境地にあった山田先生の人間像をよく表わしている。「山田耕筰は伯林留学中に美術にも演劇にも文学にも十分な理解力を蓄へて帰って来た。彼の音楽は単なる熟練工の仕事ではなくて芸術的創造慾に燃えた芸術家の仕事であった。彼の演奏会には常に高尚な雰囲気^{ベカリン}があり、演奏者と聴衆に感激が交流した。」¹¹⁾

実際、山田先生は度重なる海外活動の間にも、そして大正中期から昭和期にかけての幅広い音楽活動・芸術運動の間に、当時を代表する各分野の芸術家達と、いかに広く交流し協力し、結果自らの活動の幅を拡げることになったか、計りしれないものがあったのである。詩人、作家、画家、劇作家、演出家、舞台俳優、舞踊家、等々。それは唯単に顔の広いつき合いという範囲のものではなく、山田先生自身が積極的に求めそして自らの芸術を支える豊かな土壌となり、先生の目指す「総合芸術」の基礎となったに違いないのである。これ程の幅広い識見と人間像の豊かで多様なひろがりをもった音楽家は、確かに稀有の存在というべきではなからうか。そして、山田先生が先涯を通じて深い交遊のあった人脈が、音楽家の仲間うちからはみ出して、むしろ音楽外の諸芸術家や文化人の間に、そして一般社会人の中へも幅広く及んでいたのは故なしとしないのである。

いろいろな意味で我が国楽壇における空前絶後ともいうべき偉大なる存在であった山田耕筰先生が、相愛学園百年の歴史の上にも深くかかわっておられたことの意味をいま一度かみしめつつ、先生を偲ぶよすがとしたい。



1957年頃の山田耕筰先生と先生のサイン（筆者写す）

〔山田耕筰年譜〕の中から相愛学園に関係するものを抽出¹²⁾

() の記事は筆者の追記

- 1937年(昭12) 51歳 4月、相愛女子専門学校の顧問兼教授となり、ドイツよりシャビエウイ、ハリヒ・シュナイダー教授を招聘、又ベルトラメリー能子、武岡鶴代、山ノ井基清らを教授に迎え相愛女専音楽科を創設、自らも指導に当る。
- 1943年(昭18) 57歳 戦火の拡大と共に公私多端のため、相愛女専を一時退職。
- 1950年(昭25) 64歳 今小路覚端学園長の招きにより、再び相愛女専の教授となる。
- 1953年(昭28) 67歳 相愛女子短期大学教授に就任。
(10月、相愛学園創立65周年記念コンサートで関響を指揮〔中央公会堂〕)
- 1954年(昭29) 68歳 5月、「黒船」を日比谷公会堂で上演。
(この公演をきくために相愛女専・短大音楽科の学生は全員で上京した。)
- 1955年(昭30) 69歳 10月、(相愛女子短期大学音楽科長となり)井口基成、斎藤秀雄、伊藤武雄、池内友次郎、吉田秀和らと計り相愛学園音楽教育組織を増強。
(10月14日音楽科拡充記念演奏会、産経ホール)
- (1957年(昭32) 71歳 1月23日、相愛学園主催「山田耕筰先生文化勲章受賞記念祝賀会」〔大阪国際ホテル〕)
- 1958年(昭33) 72歳 (4月)相愛学園に大学が設置されると同時に音楽学部長に就任。
(5月、相愛学園創立70周年記念演奏会に関響を指揮、同時に相愛学園歌発表)
- 1960年(昭35) 74歳 相愛女子大学音楽学部設置の意図に基づき、新しい仏教音楽運動推進のため「宗教音楽研修会」等の指導に尽力する。
- 1965年(昭40) 79歳 12月29日、逝去。
- 1966年(昭41) 1月11日東京築地本願寺において楽団葬・告別式。(相愛女子大聖歌隊を派遣)
1月23日、相愛学園において学園葬を挙る。
(3月16日、相愛学園主催〈山田耕筰を偲ぶ演奏会〉〔フェスティバルホール〕)
(12月20日、山田耕筰先生13回忌追悼法要〔本町講堂〕)
(5月22日、毎日新聞社・大阪芸術祭協会・相愛大学主催〈生誕100年記念コンサート：山田耕筰青春のしらべ〉〔毎日ホール〕)



山田耕筰先生の自画像と「この道」の一句(久留島秀三郎氏所蔵)

—1966年1月11日の楽壇葬当日久留島氏によって印刷・配布された—

注

- 1) 1937年の相愛女専音楽科の設置に当って、山田先生が顧問兼教授として重要な産婆役を果された事情については、参考文献⑥の第3章その他に詳しくふれられている。
- 2) 山田先生の相愛女専再任のことについては、〈山田耕筰を偲ぶ演奏会〉(1966年3月16日フェスティバルホール)のプログラム『この道』に掲載された今小路学長の「追悼のことば」に、お二人の記念すべき出会いの状況が述べられている。
- 3) 石倉小三郎先生と相愛学園とのかかわりについては、参考文献⑦の第1章(p.44~50)に詳しい。
- 4) この教授組織中の「部長」表示は、後に「主任教授」に変えられた。また、声楽主任：伊藤武雄教授は2年で退任、代って1958年から柴田陸教授が就任、1959年には音楽学主任として岸辺成雄教授が就任された。なお音楽学部発足の初期から、更に東京在住の十余名の講師陣が增強された。
- 5) 参考文献③ p.7~10.
- 6) 参考文献⑪ p.69~70 参照
- 7) 参考文献④ p.152~153, p.254~(年譜)
- 8) 上掲書, p.161, p.254~(年譜)
- 9) 参考文献⑨, V. 親しかった作曲家, 4. 山田耕筰とプロコフィエフ, p.205~207.
- 10) 参考文献④ p.263~(作品目録) ほか.
- 11) 参考文献⑧ p.347.
- 12) 相愛大学編『この道』に掲載された〈山田耕筰年譜〉に加筆して示した。

参 考 文 献

〈伝記〉

- ① 山田耕筰『自伝——はるかなり青春のしらべ——』(昭和32年7月, 長嶋書房)
- ② —— 同上の再刊(昭和60年4月, かのう書房)
- ③ —— 『音楽の法悦境』(大正13年10月, イデア書院)
- ④ 社団法人 日本楽劇協会編『この道——山田耕筰伝記——』(昭和57年4月, 恵雅堂出版KK)
- ⑤ 寺崎 浩『からたちの花——小説山田耕筰——』(昭和45年12月, 読売新聞社)

〈その他〉

- ⑥ 仲 芳樹『ベゴニアの花は咲きぬ——自伝——』(昭和54年4月, 大枝印刷KK)
- ⑦ —— 『愛のりこーる』(昭和62年4月, 大枝印刷KK)
- ⑧ 堀内敬三『音楽五十年史』(昭和17年12月, 鱒書房)
- ⑨ 掛下慶吉『昭和楽壇の黎明——楽壇生活四十年の回想——』(昭和48年12月, 音楽之友社)
- ⑩ 野村光一・中島健蔵・三善清達『日本洋楽外史』(昭和53年7月, KKラジオ技術社)
- ⑪ プロコフィエフ『プロコフィエフ——自伝・評論——』(園部四郎・西牟田久雄共訳, (昭和39年12月, 音楽之友社)
- ⑫ 井上武士監修, 秋山竜英編著『日本の洋楽百年史』(昭和41年1月, 第一法規出版KK)

回想の山田耕筰先生

- ⑬堀内敬三『音楽明治百年史』（昭和43年9月，音楽之友社）
- ⑭宮沢縦一編著『明治は生きている——楽壇の先駆者は語る——』（昭和40年11月，音楽之友社）
- ⑮遠山一行他編『山田耕筰作品資料目録』（1984年11月，遠山音楽財団付属図書館）
- ⑯平凡社編『音楽大事典』第4巻，第5巻（1982～83年，平凡社）
- ⑰相愛大学編『この道』〈山田耕筰を偲ぶ演奏会〉プログラム（昭和41年3月16日）